

漢字プログラムの進捗と習得数との関係の調査

小島 聡

東京工業大学留学生センター、152-8550 東京都目黒区大岡山2-12-1

E-mail: kojima@ryu.titech.ac.jp

An Investigation on the Relationship between Kanji Program Progress and the Number of Acquired Kanji

Satoshi Kojima

*International Student Center, Tokyo Institute of Technology
2-12-1, O-okayama, Meguro-ku, Tokyo 152-8550*

日本語研修コースの漢字未習者を対象に漢字の習得状況の調査をコース中に毎週行った。漢字の意味が分かれば習得したこととし、各調査日までに導入した全ての漢字についてセルフチェック方式で習得の有無を回答してもらった。習得状況は学習者により多様であったが、習得数の伸びが鈍化する過程には共通のパターンが見いだされた。症状が進行する過程を段階ごとに5つに分類し、それぞれをステージⅠ、…、ステージⅤとすると、生活漢字はステージⅠ～Ⅲ、専門漢字はステージⅡ～Ⅳの間で推移した。これより、日本語研修コースで生活漢字と専門漢字の両者を導入する場合、重要な専門漢字はコース前半に導入した方がよいと結論した。また、コース修了5ヵ月後に行った追跡調査の結果は5ヵ月前の調査と大きな違いが見られなかった。コース修了後も継続的に漢字学習が行える新教材の開発が必要であると考えられる。

キーワード： 日本語研修コース、漢字習得数、生活漢字、専門漢字、ステージⅠ～Ⅴ、追跡調査

1. はじめに

国立大学の各留学生センターでは日本語教育が必要な大学院レベルの研究留学生に対して半年間、500～600時間程度の日本語予備教育を行っている。東京工業大学（以下、東工大と略す）の留学生センターでも「日本語研修コース」を開講して未習者・既習者用の複数のクラスで日本語教育を行っている。

この研修コースにおいて東工大では一般日本語と並行して科学技術日本語教育を行っており、未習者に対しても比較的早い段階から専門日本語特有の表現を提示し、これに慣れさせる試みが続いている^{1), 2)}。漢字教育においても、専門文献に頻出する漢字（以下「専門漢字」と略す）を、日常生活で多用される漢字（以下「生活漢字」と略す）に混合させる形で導入している。

この漢字学習の過程で非漢字圏出身の学習者から、「覚えてもすぐに忘れる」という声をよく聞く。しかし忘れるのは新しい漢字が中心なのか、前に覚えた漢字なのか、それらの比率はどの程度なのかなど、詳細は必ずしも明らかではない。また生活漢字と専門漢字の難易度の違いについてのデータも少ないため、これらのデータが取得できれば漢字プログラムの改良に向けての有益な資料になると期待できる。

信頼性のある客観的なデータを取得するためにはテストを行う必要があるが、導入した全漢字について習得の有無をテスト形式で定期的に複数回調査することは学習者の負担を考えると困難である。

そこで本研究では学習者にセルフチェック形式での調査に協力してもらうこととし、漢字導入開始の翌週

表1 『生活と科学の漢字360』の漢字

ページ	学習漢字					
p1 - p5	日月火水木金	土山川口目手	一二三上中下	四五六人大小	七八九十右左	
p6 - p10	田力子男女本	門間時分雨電	話気車百千万	半今毎年学生	東西工父母友	
p11 - p15	行見食飲休来	高長古新明少	出入立読聞書	石方面研究室	用示図表先教	
p16 - p20	住所市区名前	部屋番号押引	円安肉魚何店	体温度液固原	物例化変動比	
p21 - p25	定期駅地鉄線	病院医者業熱	同多有無料含	酸素必要重等	関係流注意炭	
p26 - p30	的法結果論文	朝昼夜晚夕週	赤白黒青色花	南北京都午後	数字計算式理	
p31 - p35	実験試対反応	性質違量合速	成元圧発積微	内外国語英会	社家館校銀場	
p36 - p40	心思考言知悉	交通自乗降帰	作使売買貸借	開閉溶止増減	短低広軽早強	
p41 - p45	全単位科勉習	問題答解求述	形球管角細平	運持酒茶待取	機向材相道側	
p46 - p50	空天海光音波	楽映画写真切	歩走足過距離	始終次最初続	事味塩加保存	
p51 - p55	置点直測正值	起暗着近便利	振構造基技術	約割倍率価返	受与説送信消	
p56 - p60	条件差現象在	専証業由他両	不非未各系型	以回々代限接	調移効活可能	

からコース終盤までのほぼ毎週、それまでに導入した漢字を習得したかのチェックをしてもらった。

2. 東工大日本語研修コースの漢字教育

ここで東工大日本語研修コースにおける漢字未習者に対する漢字教育について説明する。

漢字教材は東工大留学生センター作成の『生活と科学の漢字360』（以下『360漢字』と略す）を用いて毎日1ページ分6字ずつを60日間、合計360字導入している。この360字の選定と導入順の決定は4名の作業メンバーの話し合いにより行われた。

『360漢字』の特徴は『Basic Technical Japanese』（以下『BTJ』と略す）の第5章から第10章までの漢字120字を含むことである。これは専門日本語（科学技術日本語）の導入用のテキストとして『BTJ』を用いているためである。

提出順は必ずしも前半に生活漢字、後半に専門漢字という配列ではなく、前半にも専門漢字を入れ、また後半にも生活漢字を配している。これは『BTJ』の早い章の漢字は早めに入れなければならないこと、また後半に専門漢字ばかりが続くと学習者の負担感が大きくなるこ

と等の理由による。

表1に『360漢字』の全漢字を示す。「日月火水木金」の6字が1ページ目、「土山川口目手」が2ページ目で、「調移効活可能」が60ページ目である。

漢字の時間は毎日の『360漢字』の導入の時間の他に週1回1時間程度、復習の時間を設けている。

3. 調査方法

調査は1998年度後期の日本語研修コース・未習クラスの学習者(11名)を対象に、毎月曜日の漢字復習の時間に行った。学習者の国籍はクロアチア、タイ(3名)、チリ、フィリピン、ブラジル、フランス、ミャンマー、メキシコ、中国であった。

チェックシートには前日までに導入した全漢字が並べてあり、学習者には一つ一つの漢字を見て「意味が分からない漢字」（中国人には「読み方が分からない漢字」）があれば、それをマークしてもらった。漢字の配列の順番は乱数を利用して完全にランダムにしてある。マークする漢字を「意味が分からない漢字」のみとしたのは、調査回数を多くするためには学習者の負担をできるだけ少なくする必要があるからである。

調査を行った回数は研修コース中に11回、さらにコース修了5ヵ月後(第11回調査より22週後)に追跡調査を行った。追跡調査は第11回調査と同じチェック・シートを用い、8名の修了生の協力が得られた。

4. 結果

導入開始後14週目に実施したコース中最後の第11回調査では51ページ分、306字の漢字について調査した。この306字のうち、中国人を除く10名がマークした漢字(意味が分からない漢字)の数は、少ない者から順に

- 1, 2, 5, 16, 16, 21, 22, 31, 85, 101

であった。本稿ではこの10名の中から、アンダーラインを引いた4名の結果を報告する。

学習者Aがそれぞれの調査でマークした漢字の生データを右の表2に示す。表中、最終行の「Fs」は5ヵ月後に実施した追跡調査である。

表2 学習者Aが各調査でマークした漢字

回	マークした漢字
1	なし(全部わかる)
2	話気車半毎
3	住所部
4	病熱
5	等的論昼晩色
6	実反応質違量速発微
7	素関実対応質違積
8	素的法赤式対積
9	データなし(欠席のため)
10	昼増短単習題答解求述形球管角機相道側波
11	積借増短解求述球管向波真過距離味加保置直測值
Fs	積借溶増減輕単求述球波過距離味加置測

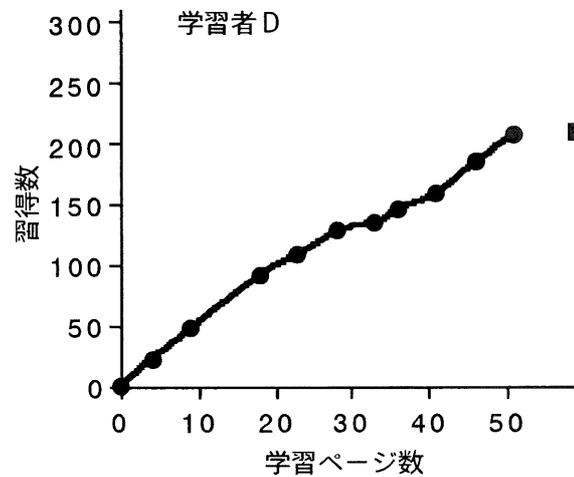
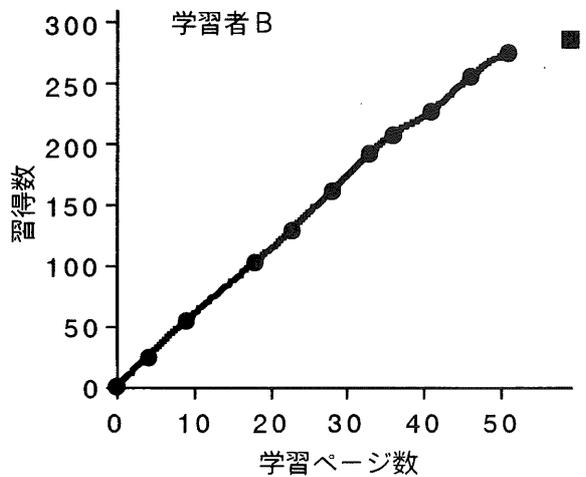
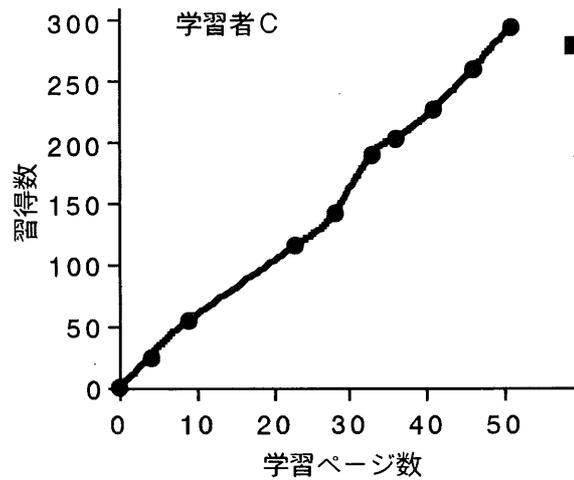
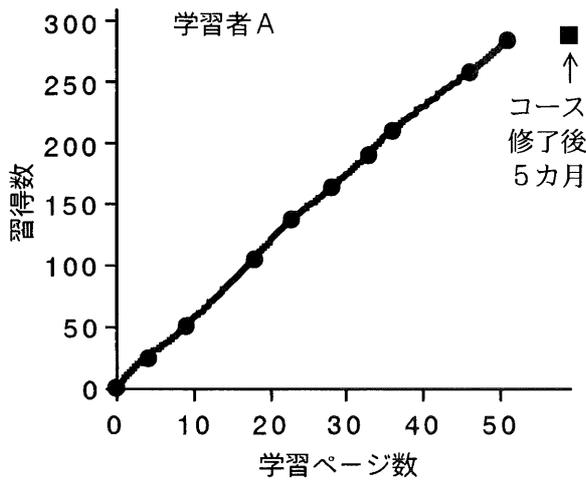


図1 漢字プログラムの進捗と習得数との関係

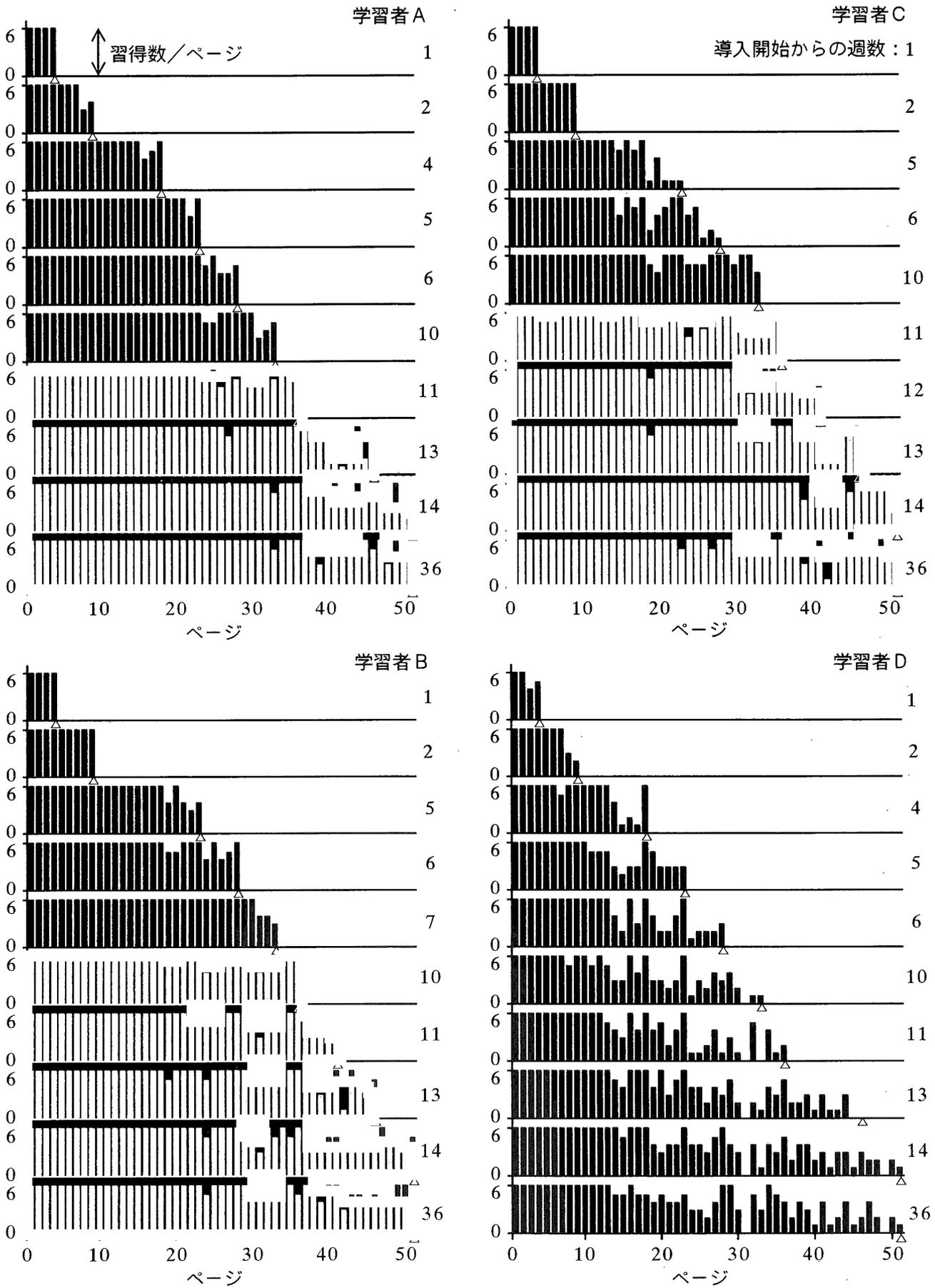


図2 『360漢字』の各ページ毎の習得数 (Δはそれぞれの調査の時までに学習したページを示す)

意味が分かる漢字の数は、調査した漢字の数からマークした漢字の数を引くと得られる。簡単のため本稿ではこの「意味が分かる漢字の数」を「習得数」と定義して使用する^{注1}。

図1は各調査日までに『360漢字』で学習したページ数に対する習得数の変化を示したグラフである。図中の●はコース中の調査、■は追跡調査の結果である。学習した漢字を全部習得した場合の習得数の値はページ数の6倍になる。

学習者Aと学習者Bの分からない漢字の数はコースを通じて学習漢字全体の1割以下で、習得数は学習ページ数にほぼ比例して増加した。5ヵ月後の調査でも習得数は減ることなく微増している。

学習者Cは前半にやや苦戦して習得数の伸びが鈍かったが、後半よく盛り返した。しかし、結果の良かった第11回調査は修了試験直前の一夜漬け的な習得だったのか、5ヵ月後の追跡調査では習得数が減ってしまった。

学習者Dは導入開始当初より伸びが鈍く、コース中盤で一度飽和状態になってしまったが、その後また伸びるようになり、5ヵ月後の追跡調査でも第11回調査の習得数が維持されていた。

次に『360漢字』の各ページ毎の習得数の内訳を図2に示す。10段の棒グラフの上側9段は、コース中の調査全11回のうちの9回分の結果、最下段は追跡調査の結果である。各ページの6字のうち何字を習得したかを一本ずつの棒で示している。横軸の下部にある△印は、調査の時点までに学習したページである。

図2で各学習者を比較すると、図1で大きな違いが見られなかった学習者Aと学習者Bとの間に、明らかな違いが存在することが分かる。学習者Aの場合、意味が分からなかった漢字は新しいページのものがほとんどであるのに対して、学習者Bは比較的広い範囲のページで習得できていない。これは学習者Aが同じ漢字を2週連続でマークすることが少ないのに対して学習者Bが2週以上引きずってしまうことが多かったことによる。

コース前半で学習者Cの習得数の伸びが鈍かったのは、20ページ付近の漢字が習得できないまま持ち越されていたことによる。また学習者Dはコースの早い段階から持ち越す漢字が多かったことが分かる。

5. 考察

5.1 習得度の鈍化パターン

図1と図2の両者より、習得数の伸びが鈍るのは、同じページの漢字を2週以上習得できないまま持ち越ししてしまうことにより生ずることが分かる。図3にその症状が段階的に進行する様子を5つのステージに分けて模式的に示す。また、それぞれのステージで現れる症状を表3に示す。

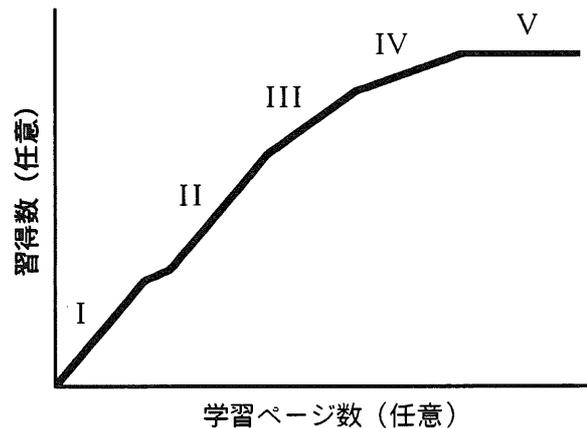


図3 習得数の伸びが鈍化するパターン

表3 図3の各ステージで見られる症状

ステージ	症状
I	学習した漢字をほぼ完全に習得する
II	習得できない漢字が現れるが、翌週には習得できている
III	習得するのに2週間以上かかる漢字が現れる
IV	ずっと習得できないままの漢字が増える
V	漢字習得数の伸びが完全に止まる

ここで示したパターンは今回の調査に限らず、一般化できるものである。「意味が分かる」、「読み方が分かる」などの単純化した習得の定義の下では学習者による違いは、I→II→…→Vの各段階への移行が早いか遅いかだけである。

ただし、次節でも述べるようにステージII、III、IVは分離して現れるというよりは混在しており、学習が進行

するとともにその比率が変化する。学習者Cと学習者Dがコース中盤で示した症状の回復は、IV→III→IIと逆方向に比率が増えたものである。

5.2 生活漢字と専門漢字

生活漢字は習得し易く、専門漢字は習得し難いことはよく知られているが、導入時期がそれにどう影響するかはよく分かっていない。今回の調査ではそれを示すデータが得られた。

生活漢字はステージI～IIIの間で推移し、コース終盤になってもステージIVに移行することはないが、専門漢字はステージII～IVの間で変化し、コースが進むほどステージIVの割合が高くなる。したがって、生活漢字はコース終盤でも習得が可能であるが、専門漢字はコース後半になるとだんだん習得が難しくなる。

これより、仮に漢字の導入順をコース前半は生活漢字のみ、コース後半は専門漢字のみとすると、コースの後半に入ったとたん急速にステージIV、Vまで症状が進んでしまう危険性がある。

結論として、研修コースで生活漢字と専門漢字の両者を導入する場合、特に重要な専門漢字はコースの前半に導入するのがよいと考えられる。

5.3 追跡調査

図2でコース最後の調査と追跡調査とを比較すると、習得数が減少した学習者Cを除いて分布があまり変化していない。一度習得した漢字は5ヵ月程度では忘れず、よく保持されていることが分かる。しかし未習得の漢字もそのままであることから、コース修了後は残念ながら漢字学習にはあまり熱心に取り組まなかったと考えられる。

6. 新たな漢字教材への展望

研修コース修了後の漢字学習について東工大では、個々の学習者がそれぞれの専門に必要な漢字を優先的に学習していくよう勧めており、そのために学習支援シ

ステムの開発³⁾を進めるなど、コース修了後の学習を支援する環境を整備している。しかし追跡調査の結果からも見てとれるように『360漢字』が終わった後も自ら積極的に習得漢字を増やしていく者は少ないのが現状である。コース中の学習スタイルとコース後の推奨学習スタイルが大きく異なることも原因の一つとして考えられる。

そこで今回の調査結果を基に、漢字未習者が1000字レベルまで一貫したスタイルで学習できる新たな漢字教材の開発に着手することにした⁴⁾。1000字習得を目指すと言っても、バラバラの漢字に関する知識を単純に増やすのみでは本来の目的である読み書きの技能向上にはつながらない。他の漢字との結び付きを重視し、語彙力も高めることができる漢字教材にすべくワーキンググループで作業を進めている。

注

注1 意味が分かるだけで習得したことになるのか、等の議論はここではしない。

参考文献

- 1) 小島 聡：初級科学技術日本語の円滑な導入法の研究，日本語教育方法研究会誌，Vol.3, No.2, pp.2-3 (1996)
- 2) 仁科喜久子、小島 聡：初級から学ぶ「やさしい科学技術日本語読解」テキストの構想，日本語教育方法研究会誌，Vol.5, No.2, pp.44-45 (1998)
- 3) 小島 聡、仁科喜久子：日本語学習支援システムの運用(1)，日本語教育方法研究会誌，Vol.4, No.2, pp.10-11 (1997)
- 4) 小島 聡、総田はるみ、柏崎秀子：漢字教材『ペアで学ぶ漢字500対』の開発，日本語教育方法研究会誌，Vol.6, No.2, 印刷中(1999)

著者紹介

小島 聡：東京工業大学留学生センター助教授【経歴】北海道大学工学部精密工学科卒、同大学院博士後期課程修了、名古屋大学工学部助手、札幌国際日本語学院日本語教師養成科修了、東京工業大学留学生センター講師【専門】日本語教育、材料工学【趣味】剣道